

第7回羽島市新しい時代の学校構想検討委員会 会議要旨

日 時	令和6年5月21日（火） 13時29分～15時22分
場 所	羽島市役所本庁舎 4階 第1委員会室
出席者	<p>【委員】 棚野委員長、松本副委員長、児山委員、石原委員、廣瀬委員、小森委員、長島委員、松下委員、後藤委員、浅野委員、新井委員、鈴木委員、木下委員、太田委員、長岡委員</p> <p>【事務局】 森教育長、不破事務局長、小川教育政策課長、稲葉同課長、高木同課長補佐、山田同課長補佐、岡田同課政策係長、高橋学校教育課長、豊島教育政策・学校支援専門員</p> <p>【参 観】 教育委員会委員：2名</p> <p>【傍 聴】 傍聴者：4名</p>
内 容	<p>1 委嘱書交付 2 開会 3 前回議事録の報告 4 議事（議事進行を委員長に依頼） (1) 羽島市の新たな学校像について（教育制度、学校運営、学校配置等） 事務局から資料を用いて説明を行う。</p> <p>【委員】 ・体験的な活動等の「等」に含まれる具体的な活動とは何か。</p> <p>【事務局】 ・地域の方から学ぶ「ふるさと学習」や卒業生や地域にある企業から学ぶキャリア教育、ICT 機器の活用等が含まれる。</p> <p>【委員】 ・羽島中学校区では、小中学校4校の代表児童と各学校運営協議会の大人が地域の今後について話し合う「絆会議」が特色の一つである。 ・清流スタジアムや市民運動公園等の運動できる環境を活かした教育ができる。 ・スポーツなどは、アンケート結果にある体験的な学びにつながる。</p> <p>【委員】 ・羽島中学校区の子どもたちは、清流スタジアムや市民運動公園等をどの程度利用しているか。</p> <p>【委員】 ・授業や部活動で使うことはない。クラブチームが使っている。</p> <p>【委員】 ・今後、体験的な学びの実現のため、羽島中学校区のスポーツ設備を利用することも考</p>

えられる。

【委員】

- ・学校が施設を簡単に使えるようになれば、体験的な学びの充実につながる。そういうことを子ども、保護者は求めているのではないか。

【委員】

- ・私は、2030年から2100年までを見通した教育のあり方を考えたい。仮に新しい学校を造ると、70年程度使用することになる。70年以上使用することを考え、子どもたちが通いたくなる学校をイメージしながら協議したい。新たな時代の教育を考えるということは、その教育を実現できる施設を考えることにつながる。
- ・羽島市は、休日の運動部活動が地域移行している。しかし望むスポーツ競技が学校に必ずあるわけではない。桑原学園には、3つしか部活動（野球部・卓球部・バレー部）がない。そのため、陸上競技を頑張りたい子は羽島中学校へ、バスケットボールを頑張りたい子は、中島中学校まで行く。これは部活動の例だが教育を受ける場所も自分で選んだり、他の学校と合同で授業を受けたりすることも考える必要がある。
- ・中学校区も大切だが、羽島市全体が一つの中学校区というイメージをもつ必要がある。運動系も文化系も中学校ごとに参加ではなく、極端な言い方をするといずれ羽島市部活動として参加する時代が来ると考えている。

【委員】

- ・羽島中学校区は他地域に比べて子どもの減少率が大きい。多様性に触れたり、選択、決定を繰り返したりする教育が今後、学校・校区単独では制限されないか。ICT機器を活用し、近隣の小学校と繋がることや山県市のようにスクールバスを導入し、一方の学校に移動し合同で授業をすることも考えられる。

【委員】

- ・美濃市では、昨年度から学校選択制を取り入れている。学校を選ぶ基準は、部活動や距離が多い。
- ・山県市では、豊かな人間関係を育むためにICT機器を活用して、近隣の学校と交流し多様な考えに触れる機会を生み出している。
- ・岐阜市では、隣接する一小一中の学校で小中一貫校をつくり、6年生になると、中学校で学習する日を設けるなど様々な制度がある。
- ・また、義務教育学校という制度もある。桑原学園ができたときは、県内に2校しかなかったが、令和6年4月の段階で県内に7校ある。近年中に11校にまで増える。
- ・中学校区ごとに考えたときに羽島市全体であれば、学校選択制という制度、校区ごとで考えるなら小中一貫校や義務教育学校という選択肢も考えられる。

【委員】

- ・学校で進めている「ふるさと学習」は、羽島市の実質的な事柄を学ぶだけでなく、地域を培ってきた人たちの関係や考え方などを含めて学ぶものである。それを体験を通して学んだり、中学校区の中で交流したりするとさらに発展する。
- ・桑原学園と羽島中学校区を比べると5%以上違う項目（アンケート結果）がいくつかある。それは各中学校区の人が自分の学校の特色をよく理解している証である。例え

ば、桑原学園校区に関わる人の約 55%が異年齢の交流は健全な発達に繋がると感じている。羽島中校区と比べると 11%の違いがある。それは、地域で子どもを育てる上で重要だととらえている。そういう思いがあるから、地域の学校としての維持していきたい願いがある。安易に統廃合ではなく、特色を活かして多様性のある羽島市の教育をつくることを、このアンケート結果は望んでいるように感じた。

【委員】

- ・竹鼻中学校区も小学校区によって異なる。福寿小学校区は、人や住宅が増え、日々景色が変わっている。地域で話題となることも異なる。竹鼻中学校区の学校運営協議会では、地区ごとの違いも含めて授業の中で体験的に学び合えるような取り組みができるとうい。伝統や芸能について地域の人から学ぶ機会を生み出したい。

【委員】

- ・令和 12 年度から 13 年度にかけて、竹鼻中学校の北舎が目標使用年数を経過とあるが、この校舎がなくなると授業に支障が出るのか。

【事務局】

- ・竹鼻中学校の北舎 1 階には、職員室、会議室、保健室等がある。2 階には、図書室、理科室等の特別教室がある。3 階には、音楽室、被服室、調理室などがある。

【委員】

- ・竹鼻中学校出身で、教員時代は中央小・中央中学校で勤めた経験がある。竹鼻中学校区では、能や鼓笛、吹奏楽など伝統や文化について学べる学習環境は教育に活かせる。これは、子どもたちも知っていることであり、地域の特色を中学校区、あるいは中学校区以外の子どもたちと対話を通じて交流、共有させていくと多様性、流動性のある豊かな人間づくりにつながる。
- ・中央中学校区には、地域の会社経営者や活躍している人の考え方や生き方を学ぶ「志授業」があり、子どもたちは楽しみにしていた。今後は子どもたち自身が気になる会社や人物を見つけ、主体的に活動できるようになると体験的な活動はより充実する。
- ・令和 12 年度の推定児童生徒数をみると、羽島中学校区や桑原学園校区の児童生徒数は、さらに少なくなる。その子どもたちが多様な考え方に触れながら学習するためには、令和 12 年度を待ってはいけなない。例えば、羽島市は平地であるという地理的な特徴を活かし、学校間、校種間の行き来が当たり前になるシステムを作るくらいの気持ちを持つことが必要である。羽島市は流動性のある教育ができるということも特色としてもよい。

【委員】

- ・中学校区にとらわれず各地域のもつよさを学ぶことが大事である。校区の移動を自由にすることで、子どもや保護者が特色に応じて行きたい学校を選択できる。
- ・校舎の建て替えが今後行われる可能性があるが、協働的な学びを実現できる校舎が理想である。例えば、ICT 機器を活用した学びができる教室レイアウトも考えたい。

【委員】

- ・近い将来と遠い見通しの両面で考える必要があるが、枝葉の部分よりも、まずは、制

度設計や運営のあり方について考え、共有していくとよい。

- ・中央中学校区は一小一中だが、行政区は様々である。そのため、地域の行事を行う際はいろいろな学校の子どもが参加する。地域で子どもを育てるというスタンスのもと、小学生には地域に初めて出るデビューの場であること、中学生には、地域の活動に参画する場であることを体験を通して学んでほしい。

【委員】

- ・校舎の建て替えは、行政の基準に沿って進めてもらえばよい。
- ・中島中学校区は、地域の人も子どももよい。これ以上何かを求めることはない。

【委員】

- ・気になるのは中島中学校区の2つの小学校は6年後には各学年単学級（推定）になることである。この現状を踏まえ、どのように豊かな人間関係を生み出すのか、よりよくするためにはどうすればよいのか。

【委員】

- ・例えば福寿のように住宅を増やせば人は増えるかもしれないが、昔から住んでいる人と新たに来た人の双方の意見を踏まえて地域や学校を運営することが課題となる。

【委員】

- ・私は、中島小学校、中島中学校の卒業生である。桑原学園と同様、部活動の数が少ない。子どもたちは、やりたい部活というよりは、消去法で部活動を選択している。そういう面では、ひがみが生まれる。
- ・羽島市学園構想の話があったが、子どもたちの数が増え、部活動の数も増えることで、自由に部活動を選ぶことができる。難しいようなら部活動を行うためのバスを市内で走らせることを考えてほしい。前回の会議録にあるように教育の平等性から考えても同じように活動できる機会を与えてほしい。そのためにも部活動は、羽島市で1本化する方向も考えてほしい。

【委員】

- ・中学校の休日運動部活動については、全ての部活動でクラブ化を実現した。子どもの数によって部活動に制限がかからないように、桑原学園の子が休日にハンドボールをやりたい場合、休日は、その競技がある中学校のクラブ活動に参加できるよう整えている。休日のクラブ活動においては、中学校区に関係なく、どこへ行っても活動できる状況である。こうした考え方は、人数が減る中で学校教育の中でも活用できるのではないか。

【委員】

- ・桑原学園は、今後子どもの数がさらに減り、複式学級も視野に入ってくる。その中でどのように豊かな人間関係を生み出していくのか。

【委員】

- ・桑原学園は義務教育学校ということは特色である。
- ・中学校区ごとのアンケートの結果、どれも数字が大きく異なるわけではない。これを

特色ととらえてよいのか。数字の高いところを特色として力を入れるのではなく、結果を学校がどのように捉え、今後の教育に活かすかが大切なのではないか。

- ・桑原は、地域の協力体制が整った地域である。学校では異年齢集団での交流に取り組み、生活科や総合的な学習の時間に地域の人が授業に参画する機会も多い。
- ・ただ、20年、30年先に桑原学園がどうなっているのか、いつの時代を想定して考えているのか、そのあたりがわからない。
- ・「願う子どもの姿」の4つは、どれも義務教育においてはやるべきことを網羅したものである。どれか一つが大切なわけではない。

【委員】

- ・昨年度、桑原学園の児童生徒が岐阜県の市町村教育委員会連合会主催の「わがまち自慢絵画コンクール」に作品を出品した。子どもたちが描いてきたのは、トラクター、水田、レンコン、ハスの花が目立った。子どもたちは視点を与えると、わが町のよさを自分で見つけられる。
- ・体験の際、地域と連携することもよい。学校で育てたスイカを地域の夏祭りで食べる。子どもも育てたスイカを食べたいし、これまで協力した地域の人とも話したいと、より地域の行事に参加する姿が期待できる。
- ・子ども目線でわが町の自慢を大人が見ることができることは学校や地域にとってよいことである。学校の意見を地域が受け入れて、地域の人が快く協力してくれる。それが学校と地域の一体化につながる。それは当たり前のことであって特色になるのか、という話が出たが特色だと考える。それを特色かと疑問を抱くほど、当たり前に関わり体制が整っている地域のすばらしさや頼もしさを感じる。

【委員】

- ・少子化は羽島市だけでなく、全国的な問題である。今後の少子化も含めて考える必要がある。時に大胆なアイデアが必要である。

【委員】

- ・移り変わりが激しく、何十年先を見通すことは難しい世の中だが、長年にわたって積み重ねられてきた地域と学校とのつながりは大きく変わらないし、大切にしたい。
- ・今後の学校のあり方の方向性は、検討委員会で示した上で、その具体的ところはそれぞれの地域や学校に任せていくとよい。それが結果的に校区の特徴に合ったものになる。

【委員】

- ・地域の施設とか地域の伝統を基盤にして、地域で育つ子を育てるシステムや多様性を認め合い、豊かな人間関係を生み出せる制度、個別最適な学びや協働的な学びがより推進できるような学習環境の整備等の方向性を考えていくとよい。

5 その他

6 閉会